巻　頭　言

事業管理者　病院長
金　戸　宏　行

皆さんは「AI」と聞いて何を思い浮かべるでしょうか？　医師の立場としては「Autopsy imaging：死亡時画像診断」を思い起こされる方もいるのではないでしょうか。しかし世間一般的には「artificial intelligence：人工知能」を思い浮かべる人の方が多数なのではないかと思います。

人工知能と言えば SF の世界では 1968 年の初上映から 10 年後に再度ロードショー上映されたスタンリーキューブリック監督の「2001 年宇宙の旅」を確か小学 6 年生の時に見たのですが、それに出てきた HAL9000 のことを思いだします。当時同級生の友人と映画を見に行ったのですが、なぜあのような難解な映画を選んだのか記憶はしていませんが、子供心に 2001 年には本当に人工知能の時代が来るものと信じていたのだと思います。

最近では将棋や囲碁、チェスなどのプロ棋士も AI との対戦に敗れ、さらに AI に奪われる職業なるものがマスコミなどにも取り上げられ、心穏やかでない人も多いのではないでしょうか。医療の世界でもすでに画像診断の領域やさらには臨床診断や治療の分野まで AI 技術は目覚ましく進歩してきているようです。2 年ほど前には、米国のクイズ番組で人間のチャンピオンを破った IBM の「ワトソン」にがん研究に関連する約 2 千万件の論文を学習させたところ、実際に日本で治療に難渋していた骨髄性白血病患者の遺伝子異常をもとに 10 分で特殊な白血病と診断しさらに適切な治療法を提示し患者の回復に貢献した事例も報告されています。またごく最近では小児科領域では AI が医師と同程度に病気を診断できることも一流ジャーナルに投稿され、医者の仕事の大半は AI でできるとみているとのことですが、完全に医師にとって代わることは永遠にないとはいわれてはいるようです。今のところ AI はあくまでも医療においては補助的な立ち位置でありますが、将来的に本格的に実働すれば、昨今の働き方改革で取りざたされている医師の過重労働問題や、医師不足問題などもあっという間に解決できてしまう事でしょう。その時に医師の職業自体が残っているのかは考えたくはありませんが、幸か不幸か私が現役で働いている間にはまだそのような時代の到来はないものと考えています。

さて市立室蘭総合病院医誌はこのたび 44 巻の発行となりました。今年は 4 編の研究報告と 4 編の症例報告、病理解剖症例概要、CPC をはじめ、各種院内研究会・研修会記録、各部署の業務活動報告、年間業績集などが掲載されております。日常多忙な医療業務をこなしている若手職員のみならずベテラン職員からの投稿もありました。今後も本誌が若手職員たちにとっては登竜門的な役割を担っていくこと、またベテラン職員からもさらに活発な投稿がなされることを期待します。最後になりますが、多忙な診療活動の中で執筆を担当された職員の皆様と本誌発行にご尽力いただいた編集委員の皆様に深謝いたします。